現代社会学部公開講座

ビルマ軍政下の人々
～難民の声を聴く～

秋　本　　勝

公開講座プログラム

●開催日時　2008年６月21日（土）13：30～17：00

●場　　所　京都女子大学Ｊ525教室

●講　　演　１.「ビルマの仏教僧」　秋本　勝（本学部教授）

２.「ビルマの女性と子供たちは今」

チョチョアイ（足立）氏（ビルマ女性連盟日本代表）[1)]

３.「タイ・ビルマ国境のビルマ難民」

中尾恵子氏（日本ビルマ救援センター代表）[2)]

４.「世界難民の日（６．20）に思う」

ココラット氏（ビルマ民主化支援会代表）[3)]

注　１）チョチョアイ氏は、1988年から民主化活動を始め、1989年に来日、日本で19年間民主化活動を続けてきた。元在日ビルマ人協会書記長、元ビルマ青年ボランティア協会書記長、現在、ビルマ女性連盟日本代表。ヤンゴン経済大学、東京国際大学出身。なお、ビルマ女性連盟（Women's League of Burma）のＨＰは、http://www.womenofburma.org/index.html

２）中尾恵子氏は、現在、私立中学校の常勤講師で、1999年より日本ビルマ救援センター（BRC-J)の代表を務める。日本ビルマ救援センターは、1988年に設立、教員や学生を中心としたNGOでタイ・ビルマ国境のビルマ難民を支援。本センター（BRC-J）のＨＰは、http://www.burmainfo.org/brcj/index.html

３）ココラット氏は、1988年から民主化運動に加わり、元全ビルマ高校学生連盟の書記長。90年の総選挙の日、反政府活動を理由に逮捕された。釈放後も監視下に置かれたため、91年タイ経由で日本へ逃れ、ビルマの民主化運動を続ける。2001年に政治難民に認定。現在、SCDB（ビルマ民主化支援会）代表として各地で講演などを活発に行う。なお、ビルマ民主化支援会（SCDB）のＨＰは、http://www.scdb.org/

今回の講座は、2007年９月に起ったビルマ軍政の僧侶・市民への武力鎮圧を契機としてビルマを学ぶ機会をもつ目的で開催された。そこで、ビルマ人難民の方を２名、ビルマ問題に関わって来られた日本人１名をお招きし、筆者を含む4名の講演を行った。100名を越える学生や一般の方々が熱心に講演に聞き入り、その後の質疑応答も活発に行われ、予定時間をかなり過ぎてしまったが、盛会のうちに終えることができた。

本講座は、京都新聞電子版に事前に詳しい紹介がなされ、また、朝日新聞（京都版　2008年６月22日朝刊）にも講座の内容が掲載された。以下に各講演の要旨（文責は筆者にあり）を報告し、最後に筆者のまとめを記す。なお、講演のテープ起こしを含むアシストをしたゼミ学生は、池内真理子、小島安結、横田佳奈（当時３年生）。

講演要旨［講演順］

１.「ビルマの仏教僧」　　秋本　勝

［この講座を開催する契機となったビルマ（ミャンマー）での事件に触れながら、事件のある意味で主役であったビルマの仏教僧について話した。さらに、ミャンマーが現在の国名であるが、難民たちは圧政を続ける軍政がつけたその名を嫌うこと、むしろビルマを使うことに触れた。］

2007年９月にビルマ軍政は、経を唱えながら行進する僧侶たちに向けて発砲した。日本人ジャーナリストでカメラマンの長井健司氏が銃弾に倒れたのもこのときである。圧政に苦しむ市民に代わって僧侶たちが立ち上がったものと言われている。これによって多くの僧侶、市民が死亡したが、軍政はほとんど状況を明らかにしなかった。

僧侶たちが行進のときに唱えた経とは、『メッタ・スッタ（慈悲経）』である。パーリ語で伝えられている『スッタ・ニパータ（経集）』のなかの短い経である。それを唱えながら静かに行進中の僧侶たちに銃を向けた軍政の罪は大きい。しかし、僧侶たちは市民の幸せとともに軍政の指導者たちの幸いもまた祈りながら読経、行進したのである。すべての恨みを捨て、復讐の心を捨てて、ひたすら人々の安寧と幸福を念願せよ、というブッダの教えをそのまま実践しているのである。以下に、この経の一部を紹介しておこう。

「足ることを知り、質素に暮らし、雑務少なく、生活もまた質素であり、諸々の感官が静まり、聡明で、気負い立つこと少なく、諸々の人の家で貪ることがない。」

「他の識者の非難を受けるような下劣な行いを決してしてはならない。一切の生きとし生けるものよ、幸福であれ、安泰であれ、安楽であれ。」

「何びとも他人を欺いてはならない。たといどこにあっても他人を軽んじてはならない。」

「あたかも、母が己が独り子を身命を賭しても護るように、そのように一切の生きとし生けるものどもに対しても、無量の慈しみのこころを起こすべし。」

「また全世界に対しても、無量の慈しみのこころを起こすべし。上に下にまた横に、障碍なく怨恨なく敵意なき慈しみを行うべし。」

（中村元『ブッダのことば』岩波文庫）

慈しみの心が行き渡る世界はすばらしい世界であろうと思う。しかし、人間はさまざまな煩悩に苛まれ、間違いをおこしがちであるから、この世に慈しみの心が満ちることは難しい。そのような人間であればこそ、常に仏の説く法を灯火として生きていかねばならない。ココラット氏（４番目の講演者）は、たとえどれほど酷い支配者であってもそれに対して決して暴力で立ち向かうことはしないという。この、あくまで対話を求めていくという姿勢こそ、仏の法の実践であり、仏の法がビルマにおいてしっかりと根付き生きている証しであると思う。私たち日本人も、このことに学びながら、ほとんど何もできないけれども、常に、ビルマのこと、ビルマの人々への視線を失ってはならないと思うのである。

２.「ビルマの女性と子供たちは今」

チョチョアイ（足立）氏

私はビルマのマンダレーという町の出身です。マンダレーは京都と同様、古都でビルマの最後の王朝がありました。また、マンダレーの女性は、これも京都と同様、きれいな言葉で有名です。

６月には「ビルマ女性の日」というのがあります。19日には多くのビルマ人活動家がこの日を祝って、世界中のビルマ女性民主化の活動家や国内でがんばっている女性たちへメッセージを出し、ビルマ女性支援を呼びかけました。なかでも、スーチーさん（６月19日生れ）は、一番長く軟禁状態にされている女性です。私たち女性としては許せないことで、一刻も早い解放を求めなくてはいけません。

今、たくさんの女性活動家が逮捕されたり、国内を逃げ回っています。女性の活動家の中には、10ヶ月の赤ちゃんを置いて、逃げ回っているニーラーテインという女性もいます。その女性活動家たちは、去年のお坊さんの行進のときに、先頭に立って、リーダーとして活動した人たちがほとんどです。ピュピュティンという女性は、エイズ患者たちへの教育や支援をして、特に世界でも注目されています。しかし、スーチーさんの政党（国民民主連盟（NLD））の青年部のメンバーだったため、軍事政権からにらまれ、二週間で捕まりました。ただ、世界中からピュピュティンさんの解放要求があり、解放されました。が、いまだに彼女は活動を自由に続けられない状況です。

また、今年３人の女性が、非暴力による紛争解決・人権状況の改善・民主主義の進展に功績のあった個人に贈られる、ホモ・ホミニ

という賞を受賞しました。私たちは、その女性活動家たちの応援と、私たちが世界中でも国内でも、女性の活動の自由を求めるために今も活動を続けています。

ビルマは男性中心の社会です。ビルマの仏教の中でもお坊さんになれるのは男性だけです。しかし、そういう文化の中にありながら、ビルマの女性は結婚しても名前を変えなくてもいいのです。また、中国とインドという大きな国に挟まれ、間にあるビルマにはその両方の国の文化も混ざっています。しかし、ビルマの女性はインド女性のように、結婚するときたくさんのお金を男性に渡す必要はありません。逆に男性が女性に結婚祝いを持ってきて結婚する、という習慣です。ビルマの女性は社会的に男女平等ではないが、家庭の中では社会・経済の面でリードする役割も多くあります。

［この後、以下のことが述べられた。］

ビルマにおける教育の性別格差。イギリス植民地時代の充実した女子教育・活発な女性の出現に対して、軍事政権下の酷い状況―例えば、貧困の中で教育も男子優先、教育水準の低さ（国家予算の0.3%、軍事費は50～60%）、88年の学生デモ以降閉鎖された大学が多いことなど。

また、生活水準の低下（75%が貧困層）、酷いインフレで、毎年50%の物価が上昇。その状況下で、女性が家族や周りを支えている。例えば、国内には仕事がないため、外国への出稼ぎ女性が増えている（タイ出稼ぎの不法労働者が80万から100万人おり、その35%が女性）。

さらに、国民の健康面、衛生面での状況の悪さ（WHOによると、ビルマの保健水準は191カ国中190番目）。例えば、５歳以下の36%が栄養不足。赤ちゃんの死亡率は30.4%（タイの４倍、日本の60倍）。また、子供のHIV感染の問題の深刻さ。HIVに関する教育が全くないため、感染患者が多い（５～10万人）。身を売る女性にも多い。

他には麻薬の問題。ビルマ北部の山岳地帯は、アジアでも有数の麻薬産地。以前、日本の支援で、麻薬の代わりにソバを植えたが、厳しい経済状況下、元に戻る。

また、女性に対するDVも深刻。一番酷いのは軍による暴力。ダムや天然ガスパイプライン建設時、女性が、昼は強制的に働かされ夜は暴行されたという例が多くある。被害者が民主化グループやNGOに訴えて、世界に知られることとなった。

少数民族内で発生した内戦は軍が簡単に制圧できるのに、制圧すれば自分たちの仕事がなくなるという理由で、わざと長引かせているのではないか。

［最後にサイクロンについて、まだまだ援助が必要であることを述べて終る。］

３．「タイ・ビルマ国境のビルマ難民」

中尾恵子 氏

タイのNGOが製作した映像を見ながら解説する。内容は、どんな状況で、難民がビルマからタイ国境を目指して来るかというもの。また国境に住んでいる移住労働者、難民キャンプの難民の説明をしたい。

〈日本ビルマ救援センターについて〉

1988年９月設立。1988年ビルマで大きな民主化運動が起こり、それを救援する目的でつ

くられたNGO団体。

活動目標は、ビルマの民主化の実現、難民キャンプにいる難民や国外に逃れている方が自分の国や村に戻ることなど。

活動内容は、日本人がビルマのことを知るための学習会、講演会開催。また、日本にはビルマ難民の申請人がたくさんいるが（特に東京、名古屋、大阪）、日本政府に難民申請をしても却下されたり不認定となってしまう。その方々をサポートする。

また、ビルマ・タイ国境の人々に送金を行う。日本国内では難民支援バザーを行うが、すべてビルマの難民が難民キャンプで作ったものを販売。

年に何回か大きなアクションを行う。毎年３月13日ビルマ人権の日には大阪（御堂筋）で難民申請人と共にアピールをする。2007年９月は軍政への抗議活動を行った。

毎月第３金曜日の午後７時から大阪のボランティアセンターでビルマのことを中心に勉強。ビルマ問題の入門編みたいなもの。

〈なぜビルマから難民が流出するのか？〉

軍事政権が原因―1962年のクーデターから1988年の民主化運動弾圧、その後の総選挙の結果無視など。88年の民主化運動は多くの人がデモに参加し、軍政は国民に銃を向けて殺した。記憶に新しいのは、昨年のお坊さんたちの祈りの行進への発砲。

軍政による強制労働、肉体労働、レイプ、強制移住。ビルマは天然資源が豊富な国なので少数民族を強制移住のターゲットとし、移住により軍政が利益を得る。

そのほかにも米などの強制買収（軍が安い値段で農家から買い上げ、人々は軍から高い米を買う）や村の焼き討ちなど。

シャン州、カレンニー州、カレン州、モン州の人々の村を軍が攻撃。その結果1984年にはタイ側に約１万人の難民が越境。また非公式難民キャンプは、タイ政府が認めず、いつビルマに戻されるかわからない。公式難民キャンプには国際的なNGOがたくさん入り支援活動を行う。ビルマ難民はタイ国境に約15万７千人、バングラデッシュ国境に２万人、マレーシア国境に数万人いるという（中国、インド国境は不明）。

〈国内避難民〉

IDPが略称。ビルマ国内で軍の目を避けながら移動・移住して暮らす。数十万～百万人で増減しているが実態は把握不可能。NGOも手の施しようがない。タイの難民キャンプの難民が、自分たちよりも酷い暮らしをしている国内避難民のためにこっそりと川や山を通り支援物資を届けている。

〈日本ビルマ救援センターから現地訪問〉

年に２回（お盆、春休み）現地を訪問。たくさんのプロジェクトの中で孤児院支援と国内避難民学生支援を行う。国内避難民学生とは、国内を避けてタイの難民キャンプの学校

へ行く国内避難民の子供。洗剤、石鹸、ろうそくなど身の回り品を提供。

また難民キャンプ内の女性の自立支援も行う。機織小屋をたて技術訓練をする。できた製品を日本に持ち帰り売る。

また、難民キャンプを持たない少数民族の支援を行う。このような民族はタイの僻村で不法労働者として働きながら自分たちのコミュニティーを守っている。

仏教支援も行う。NGOは欧米系が中心で、クリスチャン系のNGOが多い。他方、ビルマ国内の９割は仏教徒なのに、仏教徒への支援がほとんどない。そこで仏教徒の子供の学校を３ヵ所つくり運営。日本へ戻り日本各地の寺にその子供たちのサポートをお願いする。熊本県にある蓮華院のNGOが引き続いてサポートしている。

〈サイクロン被害〉

死者・行方不明者　約 13万人
被災者　約260万人

支援の努力を軍政が妨げる（天災というより人災）。サイクロン襲撃時期と新憲法制定・国民投票の時期が重なり、延期の処置をとらず全て実施。

実際にサイクロン被災者用に外国から届いた援助物資を軍政が押収、それを被災者に売る、グレードの低いものとすりかえる、市場に流すなという。

あなたにできることは？

●ビルマについてもっと知ってほしい
●知るためにはHPや本を読んでほしい
●ビルマにもっと関心をもってほしい
●友人や家族にこのことを伝えてほしい
●なにかの機会があったら織物などを買ったり手伝ってほしい
●学習会、講演会などに参加してほしい
●日本の入管に収容された難民の面会、難民申請不認定裁判の傍聴に行ってほしい
●自分も国境の難民キャンプを見ようという人は声をかけてほしい

みなさんのできることから始めたら難民支援の一歩になる。

４．「世界難民の日（６．20）に思う」

ココラット氏

みなさんこんにちは。在日ビルマ人ココラットです。今日は本当のビルマについて皆様にお話したいと思います。

ビルマは本当に豊かで、緑の多いところです。日本との違いは、130もの民族が住んでいることです。外国人は私たちに言います。「ビルマは民族が多いから、民主化するともっと大変になりますよ。」私はいつも「それは違いますよ」と答えます。なぜかというと、たとえ民族が1000あったとしても、1000の民族全員に、同じ自由を与えれば何の問題も無いと私は信じるからです。ビルマは、89%が仏教徒です。キリスト教、イスラム教が４％ずつ。あとはヒンドゥー教など、他の宗教の人たちが住んでいます。

ビルマは今、みなさんがご存知のように軍事政権の下にあります。ビルマには独裁者がいるので、民主化運動があります。一番有名なのは、1988年の活動、あとは昨年2007年の、お坊さんたちがリードした「お祈り行進」です。独裁者がいるので、政治犯がいます。そして、難民がいます。私は難民です。2001年に政府から難民認定を受けた政治難民です。武装グループもいます。

私は1988年までは普通の学生でした。何もわからず、ただ学校に行って友達と遊んでいました。しかし、1988年の３月13日、ビルマで学生運動が始まりました。その日に、ビルマ政権はその学生たちに武器を使い、発砲したのです。その日から私の心は変わりました。私たちはビルマの経済悪化は独裁政府のせいだと考え、1988年８月８日にいろいろな町へ行って民主化を呼びかけるデモ活動を行いました。民間人もこの活動に参加しました。その日の夜、ビルマの軍隊が私たちに発砲しました。その日だけで200名もの人が命を落としました。それから３日間、私たちはいくら攻撃されてもデモ行進を続けました。1000人以上の人が亡くなられました。

そして1988年９月18日、今の軍政がクーデターをしました。最初、軍政は国民たちに約束しました。近いうちに総選挙を行い、選挙後は軍は軍の仕事だけをし、政治には関与しない、という約束でした。しかしこの約束はいまだに守られていません。

［この後、以下のことが述べられた。］

国名のこと。軍政は1989年５月27日に、ビルマからミャンマーに勝手に変えた。多くのビルマ人は、今もビルマという。ビルマ軍政の友好国はミャンマーという（残念ながら日本も）。ビルマと呼んでほしい。

僧侶たちの「祈りの行進」のこと。マスコミは、ビルマの「デモ行進」というが、本当は「お祈り行進」である。ビルマではお坊さんは一番信頼されている存在。なぜ彼らが行進をしたのか。人々が物やガソリンの値段高騰で苦しんでいるのを見かねて、僧侶たちは国民のために行進をした。彼らは軍隊に発砲、拷問、逮捕されたので、政府関係者からお金や食物をもらわないという姿勢を見せた（これは布施の拒否で「覆鉢」（フハツ）という）。はじめは僧侶だけだったが、民間人も彼らを守るように参加。お祈り行進は世界の平和、貧しい人たちの暮らしが良くなるようにという願いの行進。政府を批判する言葉は一切使っていない。しかし政府は僧侶や学生たちに発砲。行進後も僧院に戻った僧侶に暴行、逮捕。26・27日の行進時には日本人ジャーナリストの長井さんも残念ながら亡くなった。

政治囚の話。ビルマには39ヶ所に約1000人もの政治囚がいる。88年の学生運動で一緒だった友達は、98年の二度目の民主化運動をリードし、60年の刑を言い渡され、去年、刑務所内で亡くなった。残った遺体を親が引き取って故郷に持って帰ることも許されなかった。この20年間に刑務所の中でなくなった人は140名。

アウンサンスーチー氏の話。民主化のリーダーで、今も自宅軟禁されたまま。彼女は1991年のノーベル平和賞受賞者であるが、そういう人を拘束した国はビルマだけ。一刻も早く彼女を解放するよう、他国はビルマ政府に圧力をかけてほしい。

ビルマの難民のこと。難民は二種類。ひとつは、民主化活動をして海外に逃げている政

治難民、もう一つは少数民族難民。難民キャンプは刑務所とあまり変わらず、外には出られない。タイ側にあるが、タイ政府は援助しない（タイは難民条約に批准していない）。国連の援助物資も全く足りない。

昨日６月20日は世界難民の日。誰も難民になりたくはない。自分はビルマを出たとき、１、２年で国に帰れると思っていた。1990年の総選挙で、アウンサンスーチー氏の党が82%の票を集め当選し、軍政も新政府を作る約束をした。しかし何年経っても、国へ帰れず、難民申請をした。仕方なく難民でいるが、難民でいたくない。今、1000名以上のビルマ人が難民。私は自分の国に早く帰りたい、帰って家族に会いたい。日本ではイラク戦争後、難民支援のグループが増え、とてもありがたいが、難民認定を受けること自体はうれしいことではない。一番の望みは、ビルマに帰ること、自分たちの国が平和になること。みなさんは支援を考えるとき、その国のことをちゃんと見てほしい、なぜ難民にならなければならないかを。ビルマの場合、独裁政権がいるから。民主化活動の支援が重要。

サイクロンの話。ナルキス（睡蓮）は５月２日にビルマを襲ったサイクロンの名。今回のサイクロンで一番責任があるのはビルマ軍政。彼らはサイクロンが来ることを国民に告げなかった。災害が起きた後も助けに行かない、国際的な援助も受け入れない。援助した民間のグループが逮捕された。

少年兵の話。ビルマの軍隊50万人のうち７万人が少年兵。軍政に反対する武装グループも少年兵を使っている。地雷もビルマはとても多い。

ビルマには、他の民主化していない、スーダンや北朝鮮などと違う点がある。1990年の総選挙に勝った党がある。アウンサンスーチー氏もいる。このような例は他にない。なのにビルマはなぜ未だに民主化できないのか。それは、軍政へ外国からのさまざまな援助があるから。中国・インド・韓国…そして日本からも。

二つのキャンペーン。ひとつは、「今のビルマに観光旅行に行かないでください！」。本当は、世界中のみなさんにビルマに来てほしいが、今のビルマには行かないでほしい。軍政の利益になるだけ。ビザをとるだけで軍政の利益になる。ただしビルマが民主化したときはぜひ来てください。

もうひとつは、「ビルマ軍政と経済活動をしないでください」。残念ながら日本の会社もビルマ軍政のためになっている。

20年間私たちは民主化活動を続けてきたが、平和的な民主化活動はもう不可能だと考える仲間が増えた。平和的な活動を続けても何も変わっていないから。武器を持って戦おうという意見もあるが、私は大反対。あくまで平和的に民主化してほしい。怒りをもてば復讐につながり、また復讐を呼ぶ。一番大事なのは、軍政とアウンサンスーチーさんが平和的に対話すること。

最後に。みなさんには自由がある。その自由を使って、他の自由がない国のために何ができるか、考えて助けてください。

［以下は参加者から重要な発言があったので記しておきたい。］

「はじめにココラットさんが我々に質問したとき、“そんな日本でありえないようなことを聞くな”と仰った方がいましたが、戦前

の日本では同じようなことが起こっていたわけで、それを知っていればあのような言葉は出なかったと思います。ビルマも、はじめから軍事政権だったわけではない。日本だってそうなる可能性が全くないとはいえない。平和で、権利を与えられているのが当たり前だと思って過ごしているうちに気づいたらその権利を失っている可能性もある。教育にしてもそうです。だから我々は事実をしっかりと見て、おかしいことはおかしいと抗議しなければならないということを子供や孫に教えていかなければならないと思います。」

５．まとめ

公開講座後１年余りが経つが、いろいろな出来事がビルマにおいても世界においても起こっている。世界は今や金融危機の真只中であり、ビルマでは、13年にわたり自宅軟禁状態のアウンサンスーチー氏が軟禁中にアメリカ人を自宅に入れたという罪で逮捕され、今年（2009年）８月11日に判決が出た。禁固３年であったが、直後に１年半の自宅軟禁に減刑された（減刑は軍政の茶番ともいわれる）。また、８月末には、軍との衝突で、少数民族１万人が中国へ越境しているという。このような国がなぜ成り立つのか。悲しいかな、天然ガスなどの地下資源をねらう各国の欲望が支えであることは間違いないであろう。

いまやグローバル化時代にあって、われわれは一国の利益だけを考えていればそれでいいということが難しくなっている。

北京オリンピック中にも種々に議論されたとおり、人権や民主化への取り組みは世界の趨勢である。しかし、アメリカも、一方で人権を重視しながら、他方で軍事力による抑圧的解決を目指してきた。オバマ大統領の登場で少し変化の兆しも見られるが、核兵器廃絶は前途遼遠の感がある。

本来は敗戦国でもあり被爆国でもある日本のような国が、一国の国益だけに熱中するのではなく、戦争の悲惨さや愚かさを伝え、平和実現のためのあらゆる努力を惜しまず、またそのことを世界に発信すべきである。日本も世界も軍事力などのハードパワーよりもむしろ文化力などのソフトパワーを目指すべきときである。

このような文脈のなかで、ビルマ（ミャンマー）についてもまた、我々は一国の事情だなどと言って無関心であってよいわけはなく、まずは軍事政権下で苦しむ人々の現状を知り、日本として、日本人として何をすべきなのか、何ができるのかを考えることは言うまでもなく重要である。仏の心である慈悲の心を少しでも私たち自身がいただいて、一人ひとりの「私」から少しでもその心を発揮していきたいと思うところである。